

P-374

ホスピタルカフェの開設について ～サービス・カフェ部門より～

徳島赤十字病院 医療技術部 栄養課¹⁾、事務部 総務課²⁾

○井上 和也¹⁾、岡田 克枝¹⁾、富永 綱志¹⁾、中西 悠二¹⁾、
栢下 淳子¹⁾、中岡 睦²⁾

【はじめに】平成24年4月末より病院内にホスピタルカフェ（仮称）が開店し、病院直営の栄養課スタッフで運営している。当課では平成16年より入院患者やその家族・関係者を対象に無料でお茶会のサービスを実施していたが、そのノウハウを集積して患者の日常に存在できるホスピタルカフェを立ち上げたのでサービス・カフェ部門の立場から報告する。

【方法】カフェは院内どこでも提供できるように移動式（屋台）とした。カフェを営業するに当たり、調理師中心のプロジェクトチームを発足させた。チームは1 サービス・カフェ部門と2菓子製造部門の2つに分けた。カフェ営業許可を受けるために、菓子製造業、飲食店営業（露店）の営業許可内容を考慮して、図面作成→図面審査→施工→施設確認の手順を踏んだ。サービス・カフェ部門では移動式カフェの図面作成、カフェのトータルコーディネートとカフェの評判を左右するコーヒーの味や提供方法についての活動を進めた。

【結果】営業日時は平日（月）～（金）の10～16時である。提供する飲物は5種類、フードは15種類とし、金額は飲み物とフードのセットで500円、飲物とフード各単品では300円とした。提供場所は、2階の外来棟と入院棟のつなぎ廊下とし、営業終了後は屋台を4階の栄養課まで片づけている。

【考察】カフェ開設から約1カ月が経過したが、出足は好調で、コーヒーの味も定着したのかコーヒー目当てのリピーターも増えてきた。屋台の移動・設営は大変だが使い易く大きな問題はない。お客様からも屋台の工夫点や美しさを評価してもらっている。コーヒーは現在ブレンドのみの販売となっているが、ソフトブレンドの開発や他のドリンクメニューの種類も増やしていきたい。

P-375

透析患者の災害時の備蓄食糧の検討

さいたま赤十字病院 栄養課¹⁾、看護部²⁾、腎臓内科³⁾

○井原佐知子¹⁾、大竹佐恵子²⁾、佐藤 順一³⁾、雨宮 守正³⁾

【目的】東日本大震災を受け、通院中の血液透析患者より、災害時の食生活についての不安の声が上げられた。そこで、災害時の透析患者の備蓄食糧について検討した。

【方法】東京都衛生局発行「災害時における透析医療活動マニュアル」に記載されている第3章を参考に、ヘルシーネットワーク「いきいき食品」の商品より、献立を作成、備蓄の最低量となる3～4日間分の食事セットを用意した。同意を得た外来透析患者8名を対象に災害時を想定し食事セットを試食して頂いた。次回透析時と通常時の血液検査データおよび体重増加量を比較し、アンケート調査を施行した。

【結果】通常時と比較し、体重増加量はいずれも軽度であった。カリウム値は不変、リン値はやや高値を示した。アンケートでは味や量などの嗜好的な意見や災害時には仕方がないなどの意見があった。但し9割以上は今後備蓄を検討したいとの回答だった。

【考察】災害時は透析患者にとり、低蛋白質・減塩・低カリウムの食事が基本となると考えられる。災害時の備えとして患者自身が関心を持って備蓄でき、透析の実施が難しい状況下でも心不全や高カリウムなどの合併症を回避できると示唆された。また透析患者だけでなく医療者側においても、透析時間の短縮へつながり有用であると思われる。体重増加量より、患者自身も日頃の食生活を改めるきっかけとなり、塩分量と水分量の関係も合わせて指導しやすいと思われる。既往に糖尿病があり、インスリン療法を行う患者においては低血糖を起こしやすく、十分なエネルギー量の確保と低血糖予防の徹底が必要と示唆された。埼玉県では、透析患者向けの災害時の具体化がされていないため、災害拠点となる日赤病院として、今後地域で共通認識のもと対応できる資料作りが必要と考える。

P-376

新病院移転の実際と振り返り

伊勢赤十字病院 看護部

○松本ゆかり、松井 和世、谷 眞澄、山川 公子、
松嶋 美紀

【はじめに】当院は、老朽化・狭隘化した旧病院から、平成24年12月末に約1.3Km離れた新病院へ移転した。移転にあたっては、救急を断らない病院方針、患者の安全確保、業務のスムーズな移行（電子カルテ化）、設備備品等の整備等、看護管理上の課題が山積した。その移転の状況について、特に患者移送の視点から振り返りを行ったので報告する。

【患者移送の実際】

1. 移送方針：救急を断らず、より安全安楽に日没までに完了させることとした。
2. 移送患者数の調整：移転当日の目標患者数を300名とし、外泊可能患者は外泊してもらい、予定手術件数の調整を行った。
3. 患者移送までの準備：1) 看護情報の移行と入力；紙カルテの情報を事前に入力し当日に電子カルテ上でスムーズに業務が遂行されるよう図った。2) ベッド等の準備と配置；褥瘡予防等に必要ベッドおよび体圧分散マットを事前に新病院に配置した。3) 患者調査；移転当日に入院継続する患者を想定した患者調査を複数回行った。調査内容には搬送区分、患者状態等を明記し、医師随伴、病室とベッド割り振り、移送車両割り振り、出発時間と順番、食事の配食場所をペーパーシミュレーションした。4) 入院患者移動；1つの病棟を閉鎖し移転時のルート確保と人員の確保を図った。5) 入院患者・家族への説明と同意6) 重症患者の搬送シミュレーション；IABP、人工呼吸器装着患者移送を想定し医師、臨床工学技士と共に救急車両を使ってシミュレーションした。7) 移送当日の現病院・新病院の職員配置と組織体制整備

【結果】当日は、計19台の救急車両等を用いて計260名の患者を移送した。16時30分に小児の搬送が終了し、トラブルなく患者移送を完了した。

P-377

新病院移転に伴う看護職人員配置の工夫

伊勢赤十字病院 看護部

○松本ゆかり、松井 和世、谷 眞澄

【はじめに】当院は、老朽化・狭隘化した旧病院から、平成23年12月末に新病院へ移転した。病床規模は同様で655床であるが、看護単位が新設され、看護単位は23看護単位に増えた。新病院における看護職員の人員配置にあたっては、希望調査に基づくとともに、大幅な病床編成変更による看護の質低下を招かないよう、基本診療科を踏襲した配置とした。今回、看護助手を含む約700名の看護職員の人員配置にあたり、工夫した点について報告する。

1. 配置希望調査の実施：新病院の構造・機能がわかるよう、図面と病棟の基本診療科を示した資料を添えた配置希望調査（第3希望まで記載しその希望理由を記述）を実施した。回収率は83%であった。
2. 各看護単位の配置人数の決定：新病院では特定入院料算定を目的としてICU/CCU・HCUやSCU、NICU/GCUが新設されたため、必要人数の割り出しを行った。また各病棟においては夜勤人員数から最低必要人数を割り出した。
3. 配置盤の作成：650名の看護職員の氏名をマグネットシートで作成し、23看護単位分の大判シートに接着しながら配置を検討した。
4. 配置の手順：1) 現所属部署に全員のマグネットシートを配置、新設部署へ分散配置した。2) 施設基準を満たす必要のある病棟を配置し、次に適性が求められるような部署として救命救急センターや手術室への配置を行った。その後少数配置部署すなわち外来部門や血液浄化センターなどへの配置や一般病棟の配置を行った。いずれも個々の希望部署と突き合わせながら調整した。今後は、年2回行っている勤務交替希望調査や満足度調査などを継続し、個々の意向やキャリアおよびWLBに沿った人員配置を行っていくことによって、やりがいにつなげていきたい。